7 転校を繰り返した幼き日の記憶　絵本の主人公にわが身を重ねる

（りぷりんと・かわさき　墨澤道男　79歳）

『とくべつな　いちにち』いかがでしたか。これから、おじいさんの子ども時代のお話をします。

私が横浜の私学に勤務していた頃、終戦記念日を迎える夏の季節になると「中学生・高校生向けに戦時中の話をして欲しい」と先生方からリクエストがありました。幼いながら戦中に生き、現在80才に近い私がターゲットになった訳であり、また戦争を知る人たちが少なくなってきた今、それを語り継ぐ責務もあると感じ、毎年応じてきました。

しかし、同じ世代の仲間や同級生などと戦時中の話をするとき、必ず出てくる空襲の「猛火」や食べ盛りだった頃の「ひもじさ」の経験・記憶が私にはありません。昭和19年春・小学2年生の時に早々と東京から群馬県に疎開し、昭和22年に戻ってきましたので、直接的な戦争の生々しい被災体験がないからでしょう。

当時、子ども達は戦災を避けるために学童疎開が義務付けられました。縁故先への個別疎開と学校単位で行う集団疎開がありましたが、私は父を東京に残し、母と兄弟姉妹5人で両親の故郷に縁故疎開をしました。集団疎開では食べるものが充分になくひもじい思いを経験した方も多かったようですが、私たち一家は親戚の農家宅に身を寄せましたので、毎食白いコメを食べるという訳にはいきませんでしたが、採れた麦で作ったうどん（群馬ではオキリコミと言う）やソバ、イモ、カボチャのほか、トウモロコシなどの雑穀類、果物はお腹いっぱい食べることが出来ました。

空襲については、疎開先の山間を爆音高くB29が通過するのを見ましたが、被弾することはなく、父の安否を心配する母から東京大空襲の話を聞く程度でした。

ですから私の経験談にはあまり悲惨な出来事は登場せず、結婚した妻が保存していた妻の父に来た「赤紙」の現物を見せながらの徴兵制度の説明、そして戦死公報が届いた時のショックなど妻から聞いた事柄のほか、学校での避難訓練で防空壕に飛び込んだこと、戦後の米の配給制度や町の食堂に行っても“食糧切符”がなければソバ一杯食べられなかったことなど、当時の生活環境に関することが主でした。

生活環境に関して言えば、戦後2年経ってからの帰京でしたが、町には露天の店が並ぶ程度で復興はまだまだという状況でした。わが家は焼失し、父の会社の社宅に住むことになり、私にとっては最初に入学した小学校、疎開先の小学校などを含めると4校目となる小学校に転校することになりました。6年間で実に4つの学校に通いましたので、はじめに紹介した絵本「とくべつな　いちにち」に登場するアルノ君の気持ちが良く分かる体験をしました。

戦後の小学生の遊びと言えば、ビー玉、けん玉、ベーゴマ、めんこなど、お金のかからない遊びが主で、グラウンドでは野球ばかりしていたように思います。私も野球にのめり込んだ一人ですが、道具はそしく、安いゴムのグローブを買ってもらった記憶があります。ゴムグローブの難点は形が整わないこと、破れると補修が上手く出来ないことなどでした。物のなかった頃が懐かしく思い出されます。

戦後70年余、一つの区切りとして物事を見直す時期なのかもしれません。世界が目まぐるしく変化する中でそれに相応しい対応を考えなければならないと思います。「戦争」のむごさを繰り返さず、築き上げてきた「平和」がいつまでも維持できるよう国を司る人たちの良識ある判断を待ちたいと思います。

『とくべつな　いちにち』

イヴォンヌ・ヤハテンベルフ作／野坂悦子訳／講談社

はじめての学校は、ドキドキだらけ！このまま家に帰っちゃおうかな…（出版社HPより）

- 発　　行：2005年03月23日
- ページ数：20ページ
- ＩＳＢＮ：978-4-06-262602-6

仲間とともに読み聞かせを続ける
（左端が筆者）